

# ロスキレ市補助器具センター

<Roskilde Kommunes Hjælpemiddelafsnittet>

お話：P.I.C. Ms. Pia Munk Lundgren  
センター主任 Ms. Hanne Birk Jespersen  
レポート：宇良（久保村）あみ

## ★国で一番

ロスキレ市はリハビリに力を入れており、リハビリの効果が国で一番と賞をもらいました。18人の判定員がおり、自宅でのリハビリ援助も行っています。

自助の援助を8週間自宅でリハビリを行いそこにはOT・PT・栄養士で作られたチームで援助を行っており、自分で自分のことができるようリハビリを行っています。

8週間で60%の人が元の状態まで戻り、回復し自立して生活できるようになったそうです。その60%という数値が国で一番となりました。

補助器具を使用して自立生活がうまくいくように支援しており、病院やホームドクターに長期リハビリをしたほうがいいという判断が出た場合は、リハビリ専門のホームでリハビリして在宅に戻ってくる期間はその人によって違うそうです。

## ★病院ではリハビリができないのか？

病院にはPTやOTはいるが医療処置をメインとしているため、医療処置が終わり退院すると自治体の受け入れとなり、補助器具センターなどにいるPTやOTが援助に入ります。どこまでが病院で、どこからが自治体かという役割分担があり、その役割の見直しを4年に一度行っています。

## ★補助器具センター

センターには、ケースワーカーのOTが18名、事務5名、倉庫器具管理、洗浄、買い



<補助器具センターで Present for you>

付け、登録をしている方が6名いらっしゃいました。OTの仕事として大事なことはリハビリで、利用者が自分のことが自分でできる、というのを目的としていると話されていました。

支援には5分野あり子ども・大人・ホーム入居の人・スピードサービス・自助の援助自助の援助は申し込みがあると3日以内に自宅へ行き、自助の援助のリハビリが始まります。早く必要とする方の元へ行きQOLを低下させないように努めています。

## ★補助器具が使われるケース

2015年9389ケースうち7543ケースが1週間以内に処理されており、80.3%と高数値。毎年ケースが増えており、8週間の自宅自助の援助に関しては559ケースのうち551ケースが1週間以内に対応できたそうです。

リサイクルが基本であり介護ベットの稼働率は 98%です。最近では緊急の配達が増えており、その背景には病院での入院期間が短期間になっていることがあげられ、退院後のリハビリは自治体の役割であるため利用者の QOL を落とさないうちに補助器具を早く利用者のもとに持っていかなければならない。

配達には、センターの公用車を使うことが多いが、大きな荷物の時などは専用の業者が運んでくれるそうです。

### ★クイックサービス

クイックサービスは一般的な器具の貸し出しが多く、倉庫にはたくさんの器具がありました。地下にも倉庫があり器具をいつでも貸し出しができる状態でスタンバイしています。

一番利用が多いのは歩行器、トイレ用のイス（手すり付き）です。もちろんリサイクルであるため、センターに返却されると洗浄室で洗浄、修理が必要なものは修理しまた次の利用者に無料で貸し出ししています（税金で支払われている）。

たくさんの便利な補助器具を提供しているが、一番は補助器具なしで自立して生活できるようになることだと職員さんが話してくれました。

### ★感想

私はセンター内のリフトを使用して介護ベットから車いすに移乗させてもらいました。ベットには特殊なシートが敷いてあり、滑りやすい部分と滑りにくい部分とがありスライドさせやすく支援しやすいように工夫されていました。私自身介護リフトを使用するのは初めてで麻痺のある人を演じてくださいと言われましたが、宙に体を浮かばせる体験は初めてなので緊

張し状況が分からない利用者だと怖くて動いてしまう気持ちがわかりました。慣れればこちらも力を入れなくても良く、重くてごめんなさいという気持ちも持たなくてよかったです。支援者もベルトをかける作業くらいで体の負担は少しであり、介護者が増えるこれからの時代には必要だなと感じました。

便利な器具ですが、施設でもリフトを使用する場合は必ず支援者 2 名で使用する決まっています。その 2 名を確保するのが難しい場合も出てくるため現場の人数確保というのも併せて課題にはなっているのだろうと感じました。

器具を利用者の元へ迅速に届ける対応の早さ、QOL を低下させないように自分でできることを減らさないようにと職員さんがスピーディに対応できている所は本当に良い点だと感じました。また、歩行器や介護ベットなどメジャーなものだけでなく、靴下をはく自助具、脱ぐための自助具と日常生活に沿った必要品が多くあり、利用者の自分でしたい、というニーズに合わせて、補助器具提供からリサイクルするまでの思いをととても大切にされていました。



<リフト体験>